# 露路(ろじ)

時任 恭一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
露路（ろじ）

【Ｎコード】
Ｎ９７７０Ｙ

【作者名】
時任　恭一

【あらすじ】
この露路は行き倒れの場所？　それとも…。
うなされた夜。ぼんやりと霧雨に浮かぶ赤ちょうちん。俺はあいつと出会った。
この露路は出発の場所？　それとも…。
流れ着いた居酒屋で、私はあいつと出会った。
大人のラブストーリーですが、ヤバくなってきたら、またムーン

ライトに移動することをご了承ください。

# 序章

またうなされた。

飛び起きる直前、決まって、あの女が俺の前にしゃがみ、拗ねたように唇を尖らせ、下から睨み付けてあの台詞を吐く。

悲鳴が轟いたのか、知るよしもなかった。ただシーツがべったりと濡れている。枕元の目覚まし時計を掴み取ると、眠りについてからまだ三十分も経っていなかった。

場末の露路にあるアパート。二階の角部屋。隣の同棲カップルの艶かしい微震も、真下に住む初老の大家が酒に酔って上げるだみ声も、今夜は伝わらない。カーテン越しの雨音が俺の荒い息に入り雑じっている。呼吸が若干落ち着いた。鼓動が正常時になる実感が得られるまで、首をさすりながらじっと項垂れる。もういいだろ。俺はまたカーテンを見上げ、ゆっくりと起き上がった。起こされた直後よりも、雨はおだやかになっているようだ。破れた雨どいからぽたぽたと、一階の軒に落ちる雨水の音の方が窓や道路を叩く雨音より大きく聞こえる。

布団のそばに転がったリモコンでテレビをつける。六畳の部屋、明かりはこれで十分。部屋の隅のパイプハンガーから取ったタオルを首に掛け、深夜のバラエティーだろうか、テレビからケタケタ漏れる笑い声を背に、俺は洗面所へ歩き出す。

大量の水を蛇口から出し、飛沫を上げて顔を洗い、Tシャツを脱ぎ捨てて、シャワーを浴びるほどでもない、汗で湿った体を乾拭きした。こんな夜は今夜だけじゃない。あの女のあの台詞とあの顔付きには長い間、悩まされてる。

昼間は、着心地のよくないスーツに身を包み、聞こえだけいい広告代理店勤務の俺。仕事の内容はキャバクラ、ホストクラブ、ピン

サロにヘルスの求人や営業広告の斡旋。その風俗店専門の広告屋の社長は、俺が以前、住み込みで働いていたパチンコ屋の常連客。煙草をくわえながらスロットを回す老人が「兄ちゃん。いい顔してるな。よかったら、うちに来ねえか？　ベテランが辞めちまって、俺一人じゃどうにもなんねえんだよ」とホールでドル箱を運ぶ俺に声をかけてきた。

高校を卒業してすぐ東京へ出てきた。パチンコ屋の店員以外にも、道路工事、デパートの警備員、ビル清掃等々、ねぐらも日比谷公園から始まって三谷の簡易旅館を転々。「可愛い顔してんだね。坊や」とボーイとして雇われたスナック。初日、仕事が終わった後、その店のチーママから「住むとこなかったらうち来ない？」顎を長い指でさぞられながらブランデーの香りがする吐息を吹きかけられた。直立不動の俺はお言葉に甘えて、三十路を踏む彼女のマンションでセックスと金に困らない、半分ヒモのような生活をさせてもらったけど、若いがゆえの飽きと萎えは、いくら楽しくても来るもの。

住み込みで働けるパチンコ屋の仕事を見つけ、黙って彼女の下から去って三年が経っていた。どうせ長続きはしねえと思うけど、また気分転換でもするか、社長の誘いに乗り、大家と知り合いというこのアパートも社長の世話で入った。

気持ちのどこかで人恋しかったのか、常に誰かと顔を突き合わせられる営業という仕事が性に合っていたのか、また転職するのが面倒臭いだけなのか、それとも、どぶ板に挟まれ、湿気ったこの露路が俺の行き倒れの場所なのか、もうここへ来て五年になる。

鉄製のアパートの階段を降りると、ここに移り住んで以来、うなされた夜によく行く場所が同じ露路沿いにある。起こされる時間によっては閉まってるけど、今夜はまだ空いている。霧雨の中、赤ちょうちんがぼんやりと浮かんでいた。『あかね』と黒字で書かれた白地の暖簾を捲り、格子戸を開ける。小上がりもない、L字のカウンターに十人も着けない、小さな居酒屋。

「いらっしゃい」
口紅なんて付けなくても、綺麗な笑顔で迎えてくれる彼女、あかねさん。今夜も白い割烹着と上げた髪に水色のかんざし。それは誰かの贈り物だろうか、初めてここに来た夜からそのかんざしは変わらない。熱燗の湯気の向こうで涼しく微笑み、目を反らし、耳元のほつれ髪を直す彼女には赤よりも水色のかんざしがよく似合う。歳にして彼女は……想像するのはやめとこ。
「また寝られなかったの？」
俺が何を最初に注文するか、あかねさんはよく分かっている。お通しを出す前に、一升瓶からコップに冷酒を注いで、カウンターに置く。
喉を鳴らしながら、俺は一気に冷酒を空け、一息吐いて、「おかわり」とコップをカウンターに叩きつけた。
「お兄さん！」
空いたコップを見詰めたままだった。あかねさんはこんなしゃがれ声じゃない。
「飲みっぷりいいね」
俺は声の方へ顔を上げた。女？　他の客の気配はしてたが、性別まで分からなかった。
ここに来る夜は他の客なんて気にしたことなんてない。他の客も俺なんて気に止めない。あかねさんの色気を抑えた飾らない性格も手伝って、張り上げる笑い話と肩肘を突く愚痴話をしに来る女の客も多いが、俯いたまま一人黙って冷酒をひたすら飲み明かす、目の下に寝起きの隈を残す男になんて誰も興味を持たない。持つ訳がない。
歳にして…俺よりちょっと年下、二十五前後。少し茶色く染まった髪を無造作に束ね、グレーのチュニックから鎖骨を浮かせ、カウンターの一番隅に座る女。ここで、あかねさん以外の誰かに声を掛けられのは初めてだ。
俺とその女だけ。他に客はいない。格子戸のすぐそばに座る俺は

「どうも……」見ず知らずの女に苦笑いじみた会釈で答える。
「よかったら……こっちきて一緒に飲まない？　お兄さん」
もっと元気で喋りの上手い奴が来るまで待ったらどうだ？　俺は役不足さ。
「あ、い、いや……」
愛想笑いで俯く。
仕事で染み付いた営業職の断り方をした俺だけど、「こっちいらっしゃいよ」とその女に熱燗のとっくりを運んだあかねさんはついでに俺のお通しを彼女の隣に置いた。仕方ないか。カウンターに両手を突いて重たい腰を椅子から上げた俺は彼女の隣に行く。まだ重たい腰を椅子に下ろすと、二杯目の冷酒が来た。最近は仕事でキャバクラ嬢やヘルス嬢に会釈するぐらい。二十代の女の相手なんか久しぶり。
カウンターの上にはまだ熱燗と冷酒、二人分のお通しであるきんぴらごぼうしか来ていない。カウンターの中、あかねさんは微かな笑みを浮かべて包丁を磨いでいる様子。酒以外の何か、注文するか。
「いそべ揚げ…」
彼女と初めて目が合う。
「二人分。俺の伝票に付けといて」
こんなもんでいいのか？　また苦笑いが浮かんでいたと思う。まだ口を付けていないコップに手が伸びると、「ありがとう。お兄さん」とまた彼女と目が合った。
「まだ名前言ってなかったよね」
名前？　聞いても言っても今夜だけになる。
「あたしは……あすか。こんな字だよ」
熱燗を注いだお猪口に、爪が真っ赤に染まった白い指を浸け、カウンターに文字をかき始める彼女。
「明日が……香るって書いて……『明日香』だよ。初めましてっと」
彼女……いや、明日香は俺のコップにお猪口を付けた。
最近、名刺を使ってしか自分の名前を名乗らなくなった俺。変わ

った自己紹介。今夜だけでも印象に残りそうだ。真似てみるか。俺も冷酒に指を浸し、「俺は透明の……」とカウンターに自分の名前を書く。

「透。一字でとおる」

微笑みを上げた明日香。口に付きかけていたコップを止めた。

「宜しく」

流れ着いた露路の居酒屋。それが、あたしと透との出会いだった。

# 夜光灯

格子戸が開き、雨で髪を湿らせた男が店に入ってきた。誰かに追われてるの？　そう思わせるほど、切らす息と青白い顔。あおったお酒も鎮静剤にならず、肩を上下させ、まだ落ち着ちつかない様子の彼。カウンターに顎杖を突きながら見詰める私の存在に気付いてない。女将は目を細めて口元をきゅっと上げ、大丈夫だから、と言わんばかりの合図を私に送った。

夕陽が照りつけ、カーテンと同じ朱色に染まる部屋。重たい頭をベッドから起こすと、ビールの空き缶、バーボンの空瓶、コンビニのお弁当箱にスナック菓子の袋、深夜から今朝に掛けての残骸が床に散乱していた。

爆発した髪を更に掻き乱してベッドから両足を下ろす、キャミとパンツ姿の私。ゆらゆら、力なく床に座り込み、テーブルの上のタバコに手を伸ばす。残っていた最後の一本をくわえ、空箱を捻りつぶしてゴミ箱へ投げた。上手く入らなかったけど、気にせずタバコに火をつける。吹き上げた煙が天井に漂い、その薄い膜も朱色に染まった。不味い。一服しただけで、タバコを灰皿で揉み消した。

駅と繁華街に近くて便利だけど、車と電車の音が少しうるさい所。半年前、最後の男が出ていってから片付けても、すぐに散らかる。特に、深酒した次の日は悲惨。よくこれだけ飲んで食べたもの。一人薄ら笑いを浮かべ、ベッドの縁に片手を突いて体を起こし、シャワーへ向かう。仕事が休みの日はこんなもん。

シャワーの後、部屋着か普段着か分からないチュニックのトレーナーを被る。ドライヤーで乾かした髪を適当に束ね、薄く化粧をした。もう部屋は薄暗くなってる。わざと色落ちさせたジーンズを履き、携帯とミネラルウォーターのペットボトルを投げ入れたバッグ

を肩に掛ける私。映画？　買い物？　一人きりで行く当ては別にないけど、部屋にこもりたくない気分だった。

特別、見たい映画はなかったけど、適当に映画を見て、欲しいものはなかったけど、形だけの買い物もした。ビルの谷間に、交差点に、駅前に、無数の人がひしめき、忙しく、騒がしく、又、虚しく足音を響かせる都会の夜。少しでも避難しようと、潜った地下街にも、ぶつかる肩同士、振り返って先に謝ろうとしても、もうその人はいない、冷たく乾いた空間が凍みていた。ここも駄目。すぐに地上に出た。

人気が無さそうに見える場所に、ふらふら、ぶらぶら、入り込むけど、決まって何もない。溜息をついて、また雑踏へ戻る。私は何を探してるんだろ？　自問自答はまた誰かが私の肩にぶつかり、消し飛ばされていく。

ファーストフードで食欲不振のままに晩御飯を済ます。時計を見ると、もう十一時近い。帰るつもりが、ＪＲではなく、今夜……開いてるかな、爪先を回し、私鉄の乗り場へ、歩く方向を変えた。

夜空に突き刺さる真っ黒な高層ビル。てっぺんに灯る赤い夜光灯をぼんやり眺めているうちに、一つ目の駅に着く。改札を出て、駅の階段を下りると、ぽつっと鼻先に冷たいものが落ちた。鞄を頭に乗せる人や鞄から折り畳み傘を出す人、それぞれ散っていく人達の中で、私は駅前のコンビニへ駆け込み、ビニール傘を買った。

雨の中、所々に、飲み屋、小さな雑貨屋、本屋、食堂の灯りが滲んでいる。ギラギラ下品な色を発するネオンの列と列の間に、人波が押し寄せる新宿。そこから電車で五分もかからない所。ここは、混雑さにつられて胸に溜めた息をほっと吐き出せる、そんな都会の休憩場所。

駅前を出て、とことこ、水溜まりを避けながら、しばらく歩くと、ぽつぽつ灯る店の明かりもなくなり、街灯だけの夜道に。そして、あの露路が見えてきた。開いてるかな、もう一度、心の中で呟く。

ビニール傘に弾く雨の音が激しくなる。一番最初ここへ来た時に吠えられた番犬も今夜は小屋に入ったまま出てこない。小屋から私を見上げて、くんん、と寂しい声を出している。ここを過ぎると、あの店がある露路の角。開いてるかな、今夜、三度目の呟きと一緒に角を曲がると、今日、部屋を出てから初めて笑ったかも、雨に濡れる赤いちょうちんが薄く灯っていた。

二回だけ私と目を合わせ、コップのお酒を半分ほど飲んだ透。黒いTシャツの袖を捲り、肩を掻きながら、何を話そうか、目玉を左右させながら口をカクカク動かし、困っている様子。

女の一人酒に目を付け、呼んでもいないのに寄ってきて、聞いてもいないのに、俺は……俺が……と自慢話を並べる今時の男どもとは違うと第一印象で感じた。どんより不器用そうな透は逆に新鮮に映る。

ぴちぴちと油が弾く音がカウンターの向こうから聞こえる。いそべ揚げの香ばしさと合う熱燗を一口飲んで、まだ肩を掻き止まない透に質問をする。

「仕事、何してる人？」

きっかけは私が作ったんだ。その後も私が責任とらなきゃ。肩を掻く手を止め、チラッと私を見て、透はまた目を反らす。

「普通の会社員」

自己紹介の次は職業を聞く。ごく普通の会話の流れ。

「君は？」

初めて、透から話してくれた。うっすら笑い、カウンターに肩肘を突いてお猪口に残った熱燗を口の中に流し込む。

「普通のフリーターだよ」

気は利くんだね。とっくりを取り、透は私にお酌してくれた。「ありがと」と軽い感じで言っても、「ああ」と返事するだけで、目は合わせてくれない。手の甲で口元を拭う私。次の質問にいこう。

「何処に住んでるの？」
「ここのすぐ近く」
俺は格子戸に顎を向け「隣の……隣」と一つ間を入れてアパートの方へ差した。
「君はどこ住んでるの？」
少し熱燗が残ったお猪口を置き、カウンターの上で両腕を重ねた明日香。
合った視線。今度は離さないように堪える。油の弾く音が止む。浮かんだその笑顔は、初対面の相手に送る、作り出しの愛想を若干感じさせる笑顔ではなかった。細く手入れされた眉を和らげ、薄い口紅が付けられた唇の強ばりが抜けた。
「ちょっと、遠い」
視線を合わせたまま、明日香がお猪口に手を伸ばした。
「おまちどうさま」
あかねさんが二人分のいそべ揚げを盛った皿をカウンター越しから運んできてくれた。
「食えよ。ここのいそべ揚げ美味いんだ。いつも、つまみはこれだよ」
コックが家で料理を作らないのと一緒。普段、喋って笑ってお客の機嫌を取る営業マンも仕事を離れれば喋らないもの、笑わないもの、と堅物になっていたかもしれない。
手を合わせて「いただきまーす」と言って、まだころもに油の小粒が弾くいそべ揚げを割り箸で摘まんで、上向きにした口の中に、熱いだろそれ、入れた明日香。
「あふ、あふ、お、ひしい、おひしい」
ここは熱燗より……。冷酒が入った自分のコップを明日香に差し出した。明日香は一気に冷酒を口に流し込んだ。
しゃがれ声は酒にやられたせいか？　結構な酒豪だ。
「いそべ揚げも、お酒も最高！　女将さん。冷酒もう一杯。あたし

の伝票につけといて」と明日香はあかねさんはコップを振った。
あかねさんは、こっちに座ってよかったでしょ、と言わんばかりの笑顔を送ってくれた。
確かに、あの悪夢は俺から消された。この夜はずっと。

やかましく鳴り響く目覚まし時計。その連続音が鼓膜と痛い頭を震わす。布団から手を伸ばし、叩いて止めた。ここで二度寝は遅刻を招く。やけくそに、布団を捲ると同時に上半身を起こす。カーテンを透かす朝日が吐き気を誘う二日酔いの朝。
あれから、明日香とよく飲んだ。俺は冷酒のみだったけど、明日香は、確か、熱燗からバーボンのロックに切り替えた。
「彼女いるの？」
「あたしも彼氏なんていたらここで一人酒なんてしてないよ」
「寂しいもん同士、今夜はとことんだからね。透」
本当に久しぶりに、俺も調子づいた。かなり酔ってからの会話はあまり覚えていない。おぼろげな時間だった。けど、明日香が「約束だよ。透」と小指を絡めて閉めた事柄。そして、生暖かい呼吸と体温の中で、俺の下や上でしゃがれた喘ぎ声が響いていたのは……よく覚えている。
もう明日香はこの部屋には居ない。酔った女を持ち帰ったのは初めてじゃない。でも、本当に久しぶりにやっちまった、と後頭部を撫でた。石鹸の匂いと湿気が漂っている。普段は壁に立て掛けてある小さなテーブルが部屋の真ん中に置かれ、まだ薄い湯気が残るコーヒーに添えられたメモ書き。布団から抜け出た全裸の俺はそのメモを拾い上げた。
冷蔵庫の中に、ビールしか入ってないんだもん。可愛らしく朝ごはんも作ってあげられないじゃない。シャワー借りたよ。じゃあね。

一夜だけ。そう思うのが無難。ごく普通の男の発想しか持たないでおこう、と思ったけど……。

一夜だけで。それでいい。まだラッシュ前の電車に揺られながら、ごく普通の女の発想を持とうとしたけど……。あれ？　あのビルの夜光灯、まだ灯ってる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9770y/

露路(ろじ)

2011年12月12日00時45分発行